



Title	ル・クレジオにおける小説世界：個人の危機から文明の危機へ [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	櫻井, 典夫
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第11593号
Issue Date	2014-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57739
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Norio_Sakurai_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 櫻 井 典 夫

学位論文題名

ル・クレジオにおける小説世界——個人の危機から文明の危機へ

本論文は、現代フランス文学を代表するノーベル賞受賞作家ジャン・マリ・ギュスターヴ・ル・クレジオ（以下ル・クレジオと略す）の作品を通時的に読解し、その文化史的かつ比較文明論的な意義と展望を考察したものである。

ル・クレジオ（1940年生）は74歳となる現在も精力的に新作を発表し続けている現役作家である。このため、その作家活動の全貌を確定的に論じることがいまだ出来ない。しかし、『調書』（1963年）で一躍有名となって以来、すでに半世紀にわたって第一線で活躍するその作家人生は、通時的歴史的な検討の対象となるに十分な質と量を備えている。実際に、1960年代におけるサルトルらの実存主義の影響色濃い作品群から、1970年代から80年代にかけての非ヨーロッパ文明・文化（とくにメキシコをはじめとする諸地域の先住民文化）との思想的共鳴を示す作品群を経て、近年の平明な日常を描く透徹した文体の小説群に至るその歩みについては、すでに多くの論者がそれぞれの見地から統一的な解釈枠組みを提出してきた。論点が集中するのは、何と云っても1970年代半ばにおけるこの作家の転機（いわゆる「インディオ体験」、メキシコやパナマでの先住民文化との遭遇に端を発する一連の転回、一種の回心）をいかに解釈するかという点である。本論文は、かかる問題意識から試みられたル・クレジオの小説世界研究の成果である。

序論では、本論文の研究目的について説明があり、関連する先行研究についての整理・評価がおこなわれる。とりわけル・クレジオの「インディオ体験」についての先行研究史が整理されている。ここでは、ル・クレジオの初期作品を導く基本的な諸イメージと、「インディオ体験」後の小説世界が示す経験の核とが、切断を伴いつつ連続した諸相として一貫した解釈を許すものであるかどうかについて、これまでの研究史では埋めきれない欠落があると指摘される。そこで本論文は、「シャーマン」としての文学者が諸文明の衝突における「和解」に貢献するという大きなヴィジョンを提示し、この視角からル・クレジオの業績を位置づけることで、これまでの研究史の空白を埋めることが可能となるとの趣旨を展開している。

第Ⅰ部は、「個人の危機」と題され、3章で構成される。この第Ⅰ部では、「インディオ体験」の影響の重要性を示すために、「インディオ体験」以前のル・クレジオ作品の本質としてあった問題意識を明確にすることが目的とされる。デビュー作である『調書』（1963）に始まり、『発熱』（1965）、『大洪水』（1966）、『物質的恍惚』（1967）、『テラ・アマータ』（1967）と続く作品群を、本論文はル・クレジオの初期作品として定義し、これらに通底する重要な主題として「狂気」を考察する。第Ⅰ部第1章・第2章では、初期作品における「狂気」の特徴とその本質について考察される。初期作品群では、「死」に対する不安が危機的に高まるものの、いまだ「死」そのものを捉える態度は大きく揺れており、時に存在の肯定と他者性の否定から死は遠ざけられるかと思えば、時に象徴的あるいは想像的な死（ないし自殺）により死者となることが試みられるという具合であり、この揺れ・振幅そのものが初期作品の「狂気」として現出していたことが示される。第3章では、『物質的恍惚』（1967）と『テラ・アマータ』（1967）の読解を行い、「狂気」を主題に執筆を続けていたル・クレジオ自身が陥っていた危機を論じる。

第Ⅱ部は、「シャーマン化のプロセスとしてのインディオ体験」と題され、4章で構成される。この第Ⅱ部では、ル・クレジオの個人的な危機ないし「狂気」が、いかにして「インディオ体験」によって乗り越えられたかが考察される。「インディオ体験」に深く関わる小説群として、この第Ⅱ部では、『逃亡の書』（1969）、『戦争』（1970）、『ハイ』（1971）、『巨人たち』（1973）、『向う側への旅』（1975）などが主に考察される。第Ⅱ部の目的は、死の不安としての「狂気」を治癒する過程を、「インディオ体験」としてを端的に論じることである。第1章および第2章では、「インディオ体験」開始の直後に発表された『逃亡の書』（1969）と難解きわまりない『戦争』（1970）の読解を通じて、「狂気」が快復へと向かう徴候が示される。第3章では、インディオのシャーマン（呪術による治癒者）が行う「ハイ（歌の祭り）」に着目し、歌やなぞなぞなどの儀礼・儀式にまつわるプロセスが、ル・クレジオ自身の「狂気」をいわば「祓う」こと、それによって危機を穏やかに乗り切ること、この双方を可能としたと論じられる。もちろん、これはいわゆる心霊術や神秘的体験とただちに同一視することはできない。実際に、第Ⅱ部第4章に論じられているように、宗教学、人類学的なシャーマン研究を援用しながら、「イニシエーション」と「インディオ体験」がシンボル操作による「象徴的効果」から生じたものであると本論文は分析するのである。このことを特徴づける観念として、本論文は「シャーマン」という用語を広く解釈し、シンボル操作に関わり人間と自然を媒介することで「治癒」をもたらす者という意味で、これをル・クレジオのキーワードとすることになる。

最後に、第Ⅲ部は、「文明の危機」と題され、4章で構成される。この第Ⅲ部では、「インディオ体験」以降、ル・クレジオがとる作家としての立場が、西洋文明との関係において明確に規定される。これに加えて、80年代半ばにおきたル・クレジオの小説世界における大きな変化すなわち自伝的作品群の登場もまた、「インディオ体験」と接続

する一つの帰結として示される。こうして、80年代におけるル・クレジオの活動の二つの変曲点（西洋批判の開始と自伝的作品の登場）が共に、「インディオ体験」という本質的变化の派生ないし帰結として捉えられることが述べられる。第Ⅲ部第1章では『砂漠』（1980）と「ロートレアモンの夢」（*NRF*誌初出1980年）という二作品の読解を通じて、「インディオ体験」以降のル・クレジオ作品における「夢」の象徴的役割の重要性が述べられる。第2章では、『ロドリゲス島への旅』（1986）という小品が読解されるが、これは80年代半ばに登場した自伝的小説『黄金探索者』（1985）に付随する補遺的な作品である。この作品は実は、自伝的作品形成における「夢」の象徴的な働きを示す重要性を持つものであると論じられる。第3章での『メキシコの夢』（1988）の読解を通じて、「夢」によって象徴的に語られているものは、実は諸文明の衝突という破局への不安であることが示される。最後に、第4章では『パワナ』（1992）の読解を通じて、作家＝シャーマンとしてのル・クレジオが、西洋文明に危機の兆候を見て取るとともに、呪術的な所作を用いてその危機を回避しようとしている様が浮き彫りにされることで、個人の死と「狂気」の危機から、諸文明の破壊と破局の危機へと関わる作家の変貌が示されるのである。